

ハワイ島コナ広島県人会の設立と加藤磯雄

田 中 泉*

1. 研究の目的

広島県からハワイへの移民は、まだハワイがアメリカ合衆国の州ではなく、ハワイ王国第7代カラカウア王（位1874～91）の時代にさかのぼる。この王によって招請され、日布移民条約によって成立した官約移民（1885～94）の制度において、日本全国から合計29,084人がハワイへ渡り、サトウキビ農園での労働に従事した。このうち広島県からの移民は、全体の3分の1を超える11,122人にのぼり、道府県別では第1位を占めた¹⁾。この結果、現在のハワイ各地には、広島県にルーツを持つ日系人が多く居住していて、各地に広島県人会が存在する。広島県の資料によれば²⁾、現在まだその活動が残っているのは、オアフ島の2つ（ホノルル Honolulu とワヒアワ・ワイアルア Wahiawa-Waialua）と、ハワイ島（ビクアイランド）の2つ（ヒロ Hilo とコナ Kona）である。

コナ広島県人会（Hiroshima People's Association of Kona）は、2017年3月5日に第50回の新年宴会を開催している。このことは、コナ広島県人会が50年前の1967年に設立されたことを示している。そうなら、19世紀末に始まった広島県からの移民たちは、1967年以前に県人会を作らなかったのか、また、そうならばその理由は何か。県人会は互いの親睦だけでなく、相互扶助の役割もあったはずであるが、その必要はなかったのかという視点で考えてみたい。また、1967年に設立された際にはどのよう

な事情があったのかも明らかにする必要がある。

2. 研究の方法

筆者は、これまで、ハワイ島のヒロ（Hilo）とコナ（Kona）にある県人会の新年宴会に参加し、そのメンバーと交流をはかり、県人会の成り立ちに関する記録や証言を得る基盤を作ってきた。その中でその存在を知ったコナ・広島県人会の初代会長加藤磯雄氏（Isoo Kato）に注目し、ハワイ島コナを訪問し、加藤氏の末娘ノブコ・シマモト氏（Nobuko Shimamoto）や県人会の historian であるキャロル・ザカヒ氏（Carol Zakahi）にインタビューした（2017年8月13日）。その際、シマモト氏からは加藤氏の長女であるハルコ・カトー・タガワ氏（Haruko Kato Tagawa）が加藤氏について記した手記、また、ザカヒ氏からは彼の県人会に果たした役割を記録した『コナ広島県人会50周年タック・ブック』（2017）を提供いただいた。これらの資料を訳出し、加藤氏の人生を含め、県人会設立時の事情を探ることができた。

3. コナ広島県人会初代会長加藤磯雄氏について

3.1 カトー・ハルコ・タガワ氏の手記の日本語訳

この手記は、カトーのおばあちゃん（Grandma Kato）がアキツ組（Akitsu-kumi）がどのようにして始まったかを私に分かるように話してくれたものをまとめたものです。

コナでも他の所でも、多くのコミュニティには多くの一世がいました。彼らは、正直者でよ

* 広島経済大学経済学部教授

く働く男たちで、やがては満足できる十分な貯金を携えて日本に帰る夢をもって様々な仕事についていました。多くの男たちにはその通りになりませんでした。彼らは、何年もの激しい労働と故郷に帰る希望のないまま、妻（写真花嫁さえ）もなく、病気や高齢になっても面倒を見てくれる家族もなく、独身のまま生涯を終えました。イソオ・カトー（Isoo Kato）はこれをコミュニティの問題として捉え、彼らの面倒を見て慰安するために組（kumi）を始めることに決めたのです。彼に先見の明があったのは、彼が組を作るのは、ただ高齢の一世の面倒を見るという以上の何か良いことがあるに違いないと思ったことです。それは、何かしらの機会（良くも悪くも）の際の集まりや儀式のときにメンバー全員が、協力して楽しむことなどです。1909年に組合（kumiai）は発足し、その時イソオ・カトーは23歳でした。

1907年、21歳の時、彼はホノルルに到着するとすぐにコナに渡り、広島からの先輩であるモンデン（Monden）氏のものもとに行き、見習い鍛冶になりました。1924年、彼は、世界的に有名な火山学者であるトマス・ジャガー（Thomas Jagger）氏と共同で酪農をはじめました。

数年後、彼は、彼の土地の一部を寄付して、さまざまな機能を持つクラブハウス（会館 kai-kan）を建設することに貢献しました。私たちのアルバムのいろんな場所に、新しく建物を作ったときに行う日本の風習である餅会（mochi kai）のためにクラブハウスの屋根に乗っている笑顔のイソオ・カトーの写真を見ることがあります。（この餅撒き（mochi maki）という風習は、私自身新しく建てられた家で見ることが無いので、おそらく他の新しい建築でも行われたことはないと思います）。庭の真ん中には土で作った山がありました。

私は、カトーのおばあちゃんにアキツ組の意

味を訪ねたことがあります。私が覚えているのは、それが日本の別名ということだけです。

イソオおじいちゃん（Grandpa Isoo）は、驚いたことに1909年から1941年まで32年間もアキツ組の会長を務めていました。1942年2月22日（ワシントン誕生日）日曜日の朝、彼は逮捕され、戦争の続く間、ニューメキシコ州のサンタフェに収容されていました。私は、アキツ組は近隣の組に比べてとても多くのメンバーがいるという、組のメンバーの言葉を覚えています。子どもが成長して、結婚して、家庭を作って近所に移っても、アキツ組のメンバーとして残ることを選んだことを知っています。

クラブハウスは、どのように使われたか（私の記憶で）

通常の新年会や教室以外でも、必要な際の集会で

お祝いのパーティ

柔道の稽古

縫物教室（イヨ夫人）

ボーイスカウトの集会

第2次世界大戦中の血液型の検査

いくつかの家族が一緒になっての新年用の餅つき

（補足）

私は、父イソオが家族のいない病身の男を訪問していたのを覚えています。

私は、カトーのおばあちゃんが、61歳を祝う独身の男性に赤い着物を縫ってあげていたのをはっきり覚えています。（こういう時赤いものを着るのが日本の風習です）私は、友人たちが彼を日本の故郷に送るために寄付金を募っていたのを思い出す。この男性は、ただの労働者ではなく、だれもが敬意を持っていました。私は彼の名前は知りませんが、カイナリウ（Kainaliu）にあった竹林の隣のCept-Woodsホームに住んでいました。

3.2 『コナ広島県人会50周年クック・ブック』

の加藤磯雄氏についての部分の日本語訳

広島県人会の創設者については、ほぼ44年間はっきりしなかったが、2011年になって、あるメンバーが、自分の父親が最初の会長であると述べました。すなわちそれが加藤磯雄氏で、1967年にコナ広島県人会（The Hiroshima People's Association of Kona）を創設したとのことです。この情報により、いまここに、我々はこの県人会のすべての会長と歴史を完成させることができます³⁾。

加藤磯雄氏は、1886年9月10日に広島県甲奴郡総領町上領家に生まれました。彼は、1907年1月7日にホノルルに到着、1908年から1941年まで加藤酪農場（Kato's Dairy Farm）とコーヒー農園で蹄鉄鍛冶として働きました。1909年に、秋津組（Akitsu Gumi Association）を組織し、その組長として34年間奉仕しました。また、ケアラケクア（Kealakekua）日本語学校の校長として23年間は働きました。さらに、彼は、日本人病院の建設委員長でした。第二次世界大戦がはじまった際に、彼は日本語学校の校長であった彼は収容所に入ることに選ばれましたが、彼の家族が入らなくてよかったのです。その唯一の理由は、Jagger 博士と Yates 博士というとても親しい友人が彼を助けたからです。家族は、妻のキクエと6人の子どもたちで、最年長は15歳の息子で、最年少は1歳半の娘でした。彼が収容所にいた4年間、彼の家族はコーヒー農園で働いたり、着物を縫ったり、ラウハラの手織物を編んだりして生き延びました。彼らは、税金を払うために牧場を売りさえました。

戦争が終わって1945年にコナに戻ると、数多くのコミュニティの問題に首を突っ込み、家族や農場に集中して欲しいという要求をそのたびに拒否しました。彼は、かつて責任を負ってきたスポットライトやリーダーシップから離れて、静かだが忙しい生活を送ることを計画しました。

彼は、その時、もう60歳でした。

そのうち、日本政府は、国家間交流と好意の意思表示としてそれぞれの県の役人をハワイにおける日本人コミュニティに派遣するようになりました。他県の県人会は、訪れた役人たちに地元のスタイルで暖かい歓迎会を開くことができました。広島県知事がコナに来る際に、コナには広島県出身者やその子孫がいるのにも関わらず、まだ県会がありませんでした。ハワイの日系人が戦争中に味わった苦勞を慰め元気づけるためにやって来る高官を、どのようにしたら敬意と尊厳をもって迎えることができるのか。磯雄氏はもはや裏方とどまって何もしないことはありませんでした。彼は、一連の必要な活動について先頭に立ちました。コナのすべての地域から人々を自分の家に呼んだので、よく計画されたコナ広島県人クラブが生まれるまで時間はかかりませんでした。1967年、広島県人の100家族がカハルウ＝ビーチパークに集まり、設立祝賀会が開かれましたが、この時82歳の磯雄氏は全員の一人ひとりを歓迎しました。

その3日後、広島県の永野県知事と幹部たちは、レストラン「てしま」で開かれた正式のレセプションに招かれ、加藤磯雄氏の歓迎スピーチで迎えられました。これは、彼の最後の社会貢献でした。そのすぐ後、1世である磯雄氏は、計画通り、会長職を2世のヨシミ・ウエモト氏に譲りました。この件が済むと、磯雄氏は、再び、公的な責務から遠ざかることを誓いました。彼は、残りの日々を、植木と盆栽の収集で過ごしました。1972年、彼は、裕仁天皇から勲6等旭日章を賜りました。そして、1976年89歳で亡くなりました。

3.3 加藤磯雄氏の経歴（略年表）

上記2つの資料より、加藤磯雄氏の経歴を以下の略年表にまとめた。

| | | |
|----------------|-----|-----------------------------------|
| 1886年 9月13日 | | 広島県甲奴郡総領町で生まれる |
| 1907年 1月7日 | 21歳 | ホノルルに到着後コナに移り、コーヒー農園で鍛冶として働く |
| 1909年 | 23歳 | 秋津組 (Akitsu Gumi) を組織する |
| 1919年 | 33歳 | ケアラケケア (Kealakekua) 日本語学校の校長となる |
| 1924年 | 38歳 | 世界的な火山学者 Thomas Jagger と共同で酪農を始める |
| 1942年 2月22日 | 57歳 | ニューメキシコ州サンタフェの司法省特別収容所に収容される |
| 1945年 後半 | 60歳 | コナに帰還、すぐにコーヒー園に戻る |
| 1967年 | 82歳 | 広島県人会を組織する |
| 1972年 | 86歳 | 勲6等旭日章を授与される |
| 1976年 | 89歳 | 死去 |

4. 考 察

4.1 1967年まで広島県人会が組織されなかったことについて

1967年に、現在のコナ広島県人会が加藤磯雄氏によって組織されたことははっきりした。それ以前について、「なかったこと」を証明することは難しいが、それに代わる相互扶助団体として、秋津組があったことが証明された。もし広島県人会がすでにあったならば、秋津組のような団体は必要なかったはずであり、また、加藤氏のようなコミュニティリーダーがそれに関っていないはずはない。

ノブコ・シマモト氏の話によると、秋津組に加入していたのは、サウス・コナを貫く11号線沿いのカイナリウからキャプテン・クック辺りの人びとであることが分かっている。この地域は、現在でも、曹洞宗大福寺やコナ本願寺などの仏教寺院や日系人の名前の付いた商店・レストランが並んでいるが、戦前にはもっと多くの商店があり、周囲のコーヒー農園で働く日系人が利用していたと思われ、この地域には日系人が集住し、相互扶助団体が必要となっていたと思われる。

4.2 加藤磯雄氏が秋津組を組織した理由について

Akitsu-g(k)umi という名称の漢字表記については、当初、広島県にある「安芸津」を想像していたが、ハルコ氏の手記の中の「私は、カトーのおばあちゃんにアキツ組の意味を尋ねたことがあります。私が覚えているのは、それが日本の別名ということだけです。」ということから、Akitsu が漢字では「秋津」であることが分かった。

ハルコ氏の手記では、加藤磯雄氏が、秋津組を組織した理由として、一世の男たちは、結婚しないまま独身で、病気や高齢になっても面倒を見てくれる家族もなく暮らしていたのを問題視し、面倒を見、慰めようと組織を作ったことがあげられている。

官約移民が始まってハワイに渡ったのは、独身男性がほとんどで、出稼ぎして故郷の実家に多額の送金をして、または携えて故郷に錦を飾ることを目標としていた。このため、一生懸命に働いたが、誘惑も多く十分に金が貯まらずそのままハワイに定住した者も多かった。

また、何かの集まりや結婚式や葬式などの儀式のときにも役立つと考え、自分の土地の一部

を寄付して、kaikan（会館）と呼ばれたクラブハウスを建設することに貢献している。この会館は、実際、新年会などのお祝いのパーティ、柔道や縫物教室、ボーイスカウトの集会、新年用の餅つきなどにも使用されたことが補足として記録されている。

4.3 加藤磯雄氏のリーダー性について

加藤磯雄氏が秋津組というコミュニティを組織し、そのリーダーとなっていたことは分かったが、そのリーダー性の源はどこにあったのか。彼は、21歳でハワイに渡っているが、生まれてからそれまでの経歴については、まったく記録されていない。どのような学歴なのか、またどんな職業についていたのか。当時の総領町は農業中心であり、農家の生れである可能性が高い。また、ハワイで働き始めてその2年後に23歳という若さでは秋津組を組織したという事から、渡布前からリーダー的な資質を備えていた可能性が考えられる。

シマモト氏の話によれば、加藤が秋津組を組織していたのは、サウス・コナと呼ばれるカイナリウ、ケアラケア、キャプテン・クック辺りであり、コーヒー栽培に関する日系人も多くいた地域である。官約移民で渡布した人びとがこの地に定着して残っているとすれば、コナでの生活経験は加藤より20年以上は長いはずであり、渡布2年目の加藤氏がその中でリーダー的な存在になるには、よほどの資質があったに違いない。また、33歳の時に、日本語学校の校長となったという事から、加藤が少なくとも日本にいたときに中等教育を受けていた可能性が高い。多くの移民労働者はせいぜい初等教育か高等科までであり、加藤の学歴が抜きんでていた可能性が高い。

結局、加藤磯雄氏は1909年から41年まで秋津組の会長を務めている。会長職の間には、地域のボス的な存在になっていただろう。

4.4 第二次世界大戦中の強制収容

加藤磯雄氏は、1919年より日本語学校の校長を務めていたために、日本人・日系人の指導者とみなされ、開戦の翌年2月から終戦まで本土ニューメキシコ州のサンタフェに強制収容されている。

この収容所は、アメリカ本土だけでなくハワイや中南米に居住していた日本人・日系人の指導者たちが「危険敵性外国人」としてFBIによって拘束され、収容された司法省管轄の特別収容所である。これは、アメリカ西海岸に住んでいた約12万人の一般の日本人・日系人の定住者が根こそぎ収容された戦時再転住センター（Wartime Relocation Center）とは異なる。ハワイから本土の特別収容所に送られた指導者には、日本語学校教師、僧侶、神官、新聞記者、コミュニティのリーダーなどがいたが、多くは、家族も一緒に収容された。

クック・ブックの資料では、加藤磯雄氏が拘束されたとき、妻キクエと6人の子ども（15歳の息子から1歳半の娘まで）は、コナの農場に残ることができたのは、Jagger博士たちのおかげだったとされている。Jagger博士とは、今もキラウエア火山のハレマウマウ火口の近くにある火山資料館にその名前が残る世界的な火山研究者で、加藤磯雄氏とは、共同で酪農場を経営していたことになっている。しかし、加藤磯雄氏が、どのような経緯でJagger博士と知り合い、共同で酪農場を経営するようになったのか、また、Jagger博士が加藤磯雄氏の家族を助けるほどの友好関係を持つようになったのかは不明である。

4.5 広島県人会を組織した理由

まず、コナ広島県人会を設立した中心人物が、加藤磯雄氏であることが分かった。加藤磯雄氏が、コナで広島県人会を組織した理由が永野県知事をはじめとする広島県幹部のハワイ訪問で

あることは、クック・ブックの資料によって明らかである。加藤磯雄氏は、1968年のハワイ元年者100周年を前に、日本から各県の人びとがハワイの日本人コミュニティに来るようになり、各県人会があたたかく歓迎したが、広島県人会はなかったため、コナの各地域の広島県人を自宅に呼んで広島県人会を組織しようという話をして、カハルウ＝ビーチパークで100家族を集め、設立祝賀会を開いたのである。ただし、コナ広島県人会初代の会長を務めたのは、この1967年だけで、その翌1968年には、2世のヨシミ・ウエモト氏に会長職を譲っている。この事は、加藤磯雄氏としては組織することのみを自分の役割と考えていたのだろう。その後の運営は、次の世代に任せることは初めから考えていたに違いない。加藤磯雄氏は、戦前よりサウス・コナにあった秋津組の会長となっていたのであり、また農園や牧場を経営する傍ら、日本語学校を設立するなど、現地の日本人・日系人社会のリーダーになっていたのである。戦後は自らの農園を経営し家族の面倒を見るだけになっていたが、県人会を設立する必要性が生じたという事態に伴って、リーダーとして加藤氏が再び引っ張り出されたように思われる。そして1968年8月には、永野県知事と幹部をレストラン「てしま」で迎え正式なセレブションを開き、加藤磯雄氏が歓迎の挨拶をしている⁴⁾。

ちなみに、同じハワイ島のヒロにも同じ1967年に広島県人会が設立されている。ヒロのリリウオカラニ日本庭園にある石灯籠の1つは、当時の広島県知事永野巖雄の名で贈られている⁵⁾。コナとヒロの県人会が同年に設立されたことも謎であったが、この疑問も同時に解けた。

5. 今後の研究課題

記述したとおり、2つの資料とインタビューにより、大きな疑問は解けたが、新にいくつかの疑問も生じた。その1つが考察①で述べた、

加藤磯雄氏の渡布前の状況である。彼が中等教育を受けていたとすればどこかの記録があるはずであるが、彼が小学校を1898年に12歳で卒業し、その後も教育を受けたとして考えられるのは、高等小学校か旧制中学となる。この年すでに広島県内に当時設立されていた旧制中学は多くないので、各旧制中学の同窓会名簿などを調べれば判明するかもしれない。このうち、広島県広島第一尋常中学校（現、広島県立国泰寺高校）については、大正14年度に発行された同窓会名簿『広島一中同窓会名簿』を調べたが、記載はなかった。また、旧制三次中学校（現、広島県立三次高校）の創立120周年記念の同窓会名簿（2018年発行）にも記載はなかった。

もう1つは、考察4.4でのべた永野県知事一行のコナ訪問の時期に関してである。注記4)のように、新聞報道では、それは1968年8月である。クック・ブックの文章では、県人会の設立総会の3日後、つまり1967年に県知事一行が訪問している。2年続けて県知事が訪問することは考えにくいので、この文章の「3日後」が誤りという可能性がある。このことはいずれ明らかにしたい。

また、また、設立以降の県人会の歩みについても、研究してみたい。特に、各県人会長がどのような人物なのか、どのようにして選ばれたかなどを課題として研究してみたい。

<ハルコ・カトー・タガワ氏の手記の原文>

This is my explanation as to how the Akitsukumi was started as explained to me by Grandma Kato

As in many communities in Kona and elsewhere, there were many Isseis, They were honest hard working men with various jobs with dreams of one day returning to Japan with a comfortable saving. That was not to be realized for many of them. After years of hard work and

no hope of ever returning to their homeland they ended up as bachelors with no wives (not even picture bride) to be bad and no family to care for them in sickness or old age. Isoo Kato saw this as a community problem and decided to start a kumi to help see to their care and comfort. Being the visionary that he was, he must have seen benefits of an organized kumi for beyond just caring for the aged Isseis. There would be fellowship, comforts shared benefits for all members for meetings, celebration of any occasions (good or bad), etc. etc. In 1909 the kumiai was started, Isoo Kato was 23 years old.

He was age 21 in 1907 when he arrived in Honolulu and promptly sailed to Kona to look up a Mr. Monden, a fellow villager from Hiroshima, and became an apprenticed blacksmith. In 1924 he became a dairy farmer in partnership with Mr. Thomas Jaggar, a world renown volcanologist.

Some years later he was instrumental in donating (??) part of his land and building a much needed club house (kai kan) to hold various functions. Somewhere in our albums there is a picture of a smiling Isoo Kato on the roof of the clubhouse for the mochi kai, a Japanese custom of dedicating a new building. He was tossing mochi to the crowd below in the yard. (This practice of mochi maki is probably not performed for any new building as I've never seen it done for newly built homes) There is a mound of raised dirt in the center of the yard meant for sumo competition where young boys took part in including my two brothers.

I asked Grandma Kato what Akitsu-kumi meant. All I remember is that it is just another name for Japan.

Grandpa Isoo served as president of the Akitsu-kumi from 1909–1941, an incredible 32 years.

On Sunday morning, February 22, 1942 (Washington's birthday) he was arrested and interned for the duration of the war at Santa Fe, New Mexico.

I remember comments from other kumi members that Akitsu-kumi has a huge membership compared to neighboring kumis. I know that as children grew up, got married, and made their homes out of the neighborhood, they chose to retain their membership to Akitsu-kumi.

How the club house was used (My recollection)

Meetings as needed but always a New Year's mtg, classes

Celebrations parties

Judo lessons

Sewing school (Mrs. Iyo's)

Boy scout meetings

Blood typing during W.W.2

Mochi pounding for New year held jointly with several families

By Haruko Kato Tagawa (daughter)

Trivia

I remember that Father Isoo made a visit to an ailing man who had no family.

I clearly remember Granma Kato sewed a red kimono for a bachelor man to help celebrate his 61th birthday. (Japanese custom of wearing red for the occasion). I vaguely recollect that friends must have made a collection to send him home to Japan. This man was not just a laborer but someone held in high regard. I cannot remember his name but I remember where he lived in Kainaliu near Cept-Woods'

home next to a bamboo grove.

付記：この論文は、平成29年度広島経済大学特定個人研究費を使用して調査した成果である。

注

- 1) 広島県編『広島県移住史 通史編』第一法規出版株式会社 1993年刊, 9 ページ
- 2) 広島県は地域政策局国際課において、海外の広島県人会の情報を掌握している。その資料によれば、広島県は9か国28団体の県人会と交流をはかっている。また、会員の人数、世帯数、会長などが明らかになっている。
- 3) コナ広島県人会の歴代会長は、前述のクック・ブックの記述によれば、以下のとおりである。
 - 第1代 加藤磯雄 Isoo Kato (1967)
 - 第2代 ヨシミ・ウエモト Yoshimi Uemoto (1968-74)
 - 第3・10代 ミノル・イナバ Minoru Inaba (1975-79, 1988-89)
 - 第4代 マサユキ・カワカミ Masayuki Kawakami (1980)
 - 第5・12代 ジョージ・ヒライ George Harai (1981-82, 2004)
 - 第6・11代 コルバート・ノザキ Colbert Nozaki (1983, 1990-2003)
- 4) 広島県知事永野厳雄のハワイ訪問の日程は、当時の中国新聞により知ることができる。それによれば、永野県知事夫妻と石垣県総務部次長が、現地時間の1968年8月10日から19日までハワイ州のオアフ島、ハワイ島、マウイ島、カウアイ島を訪問し、各地で合計805人の80歳以上の日系人を表彰し、記念の木杯を贈っている。(8月12日付, 21日付および23日付)
- 5) 1967年10月19日付の中国新聞によれば、この石灯籠は、「十七日、運輸省練習船の日本丸に積み込まれて、東京の晴海海岸を出帆した。日本丸は来月十八日にハワイへ着き、百年祭実行委員会(坂口一男委員長)や広島県人会の代表らに渡される」とある。また、石灯籠については、「奈良の東大寺法華堂前にあるのと同じ三月堂型で、高さ二メートル七十センチ。京都市内の石工山本寅之助さんが九月に刊行した」ものであるとも紹介されている。なお、この石灯籠には、「ハワイ日本人移民百年祭記念 一九八六年六月 贈広島県知事 永野厳雄」と刻まれている。

- 第7代 ケネス・コモ Kenneth Komo (1984)
- 第8代 リキオ・モリモト Rikio Morimoto (1985-86)
- 第9代 ロイ・ホンダ Roy Honda (1987)
- 第13代 シェリル・クラシゲ Cheryl Kurashige (2005-07)
- 第14代 クラウディア・チャン Claudia Chang (2008~)